

〔能楽〕 研究展望(昭和48・49年)

片桐, 登

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

94

(発行年 / Year)

1976-02-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020256>

研究展望（昭和48・49年）

片桐 登

はじめに

昭和四十八・四十九年の両年中に公刊・公表された、能・狂言関係の単行本・論文・随想などは、その分量も傾向も、従前とさほど変らなかつた。研究活動の基礎ともなる史資料等の翻印紹介やテキストの校訂・校注の仕事は続けられたし、能楽論研究・謡曲作品研究・歴史研究などの発表や、長老演者による芸談随想、広く一般の人びとに向けての入門（鑑賞）解説書の刊行など、ここ数年來の傾向にしたがつて成果をあげて来た。そうした中で、この両年中に刊行された単行本に関し、いくつか目についた点もあるのでふれておくことにしたい。

その一は、能楽論（伝）書、謡曲・狂言本文、能楽史資料集の刊行が比較的多かつたことである。細かに見れば、分野を超えた大きな叢書の中の一冊であったり、能楽資料の集成刊行を目的とする叢書の一部であり、また単独の刊行書でありもするし、語釈注解のあるものないもの、現代語訳をも付するものなど、それぞれが性格と体裁を異にするものの、未刊資料・本文が、厳密な校訂により、または読み易さを旨として提供された意義は大きいと思

われる。

その二は、狂言を正面からあつかつた書物が目につくことである。狂言役者による狂言芸論の研究書、狂言史研究書、狂言の登場人物を中心に論じた書、前項にも含まれる狂言のテキストの校注・現代語訳、あるいは狂言の鑑賞入門の書から随想まで、幅広く刊行された。いまだに、能のかげにかくされてしまうことの多い狂言に関し、これだけバラエティに富み、かつ多くの冊数の書物が刊行されたことは、これまでには見られぬことではなかつたかと思われる。狂言にとって、嬉しいことだ。

その三は、一・二と重なるものもあるが、能・狂言の鑑賞入門の書が多く刊行されたことである。写真を豊富に使って、総合的に鑑賞の要点をのべるものや、具体的に一曲一曲を取りあげて、梗概と見どころを案内するもの、大冊ともいふべきものから新書・文庫版まで、解説の視点・重点の置き所や体裁にはそれぞれ特徴があつて、有益な書が多い。年令的に若い層の人びとが能や狂言に強い関心を寄せている折から、大方の要望に応えたかたちとなつて、時宜を得たものといえよう。

以上、単行本に見られる全体的傾向の一端を示して、四十八・

四十九年の概観とし、以下に個々の単行本・論考について紹介することにしたい。

〔48年単行本〕（刊行順）

『能の絵本』（木村利行著。井場書店、二九四頁、一月）

現行の能・狂言の上演舞台の印象をもとにして、能楽鑑賞の方法を説くと同時に、その曲の背後にある、日本人と日本の自然・風土・民俗などさまざまな生活事象を、幅広く語ろうとするもので、ユニークな入門書でもある。書名の通り、豊富に挿入されたペン画が持ち味となっているが、著者が強い関心を寄せる能面・能装束に関する記述も特色となっている。

『わらんべ草^{（狂言）}研究』（米倉利昭著。風間書房、七八六頁、三月）

米倉氏が長年にわたってすすめてきた研究の成果を集大成したものである。「わらんべ草」はこれまで、江戸時代初期の狂言史研究の資料として使われることが多く、狂言論書としての性格も含めて論じられることは比較的少なく、そういう意味では、正当な評価を受けていたとはいえない。いま、本書の出現によって、その成立過程や著者大蔵虎明の伝記などが明らかになったが、なによりも、本来の狂言芸論として総合的に把握され、位置づけられることになったのは喜ばしい。本書の論考は前後二編の二部構成で、前編が「狂言の史的展開」とわらんべ草以前の狂言論、第一章「狂言の史的展開」、第二章「わらんべ草の著者大蔵虎明考」、第三章「わらんべ草以前の狂言論」、後編は「わらんべ草研究」第一章「わらんべ草の成立」、第二章「わらんべ草の典拠」、

第四章「わらんべ草狂言論の骨格」、第五章「わらんべ草狂言論の本質とその限界」、終章「研究のまとめと問題点」となっている。

米倉氏の論考は、実証的な方法で貫ぬかれており、十分に説得力をもっているが、著者自身も述べておられるように、なお未開拓な部分や不分明な点が少くない。続稿を期待しておきたい。なお、附載資料編には、Ⅰ（昔語諸本）として（一）「昔語」京大本・（二）「昔語」松平文庫本・（三）「昔語」わらんべ草所収本、Ⅱ（万治二年奥書本）として「広島大学蔵秘蜜録」があって参考になる。

『狂言^{落魄した神々の変貌}』（戸井田道三著。平凡社、二七七頁、四月）

かつて雑誌「悲劇喜劇」に連載された論考をまとめられたもので、戸井田氏の原著『能神とを食の芸能』と対をなす書といえよう。Ⅰ 狂言世界の群像、Ⅱ 狂言の性格について、の二部に分たれる。Ⅰは、太郎冠者・大名・すっぱ・めくら・わわしい女、など十二項目にわたって、狂言に登場する人物類型の考察。基本的には、狂言そのものが時代的なものの反映で、狂言の荷い手が、成り上がる側におり、のびる生命力を肯定する姿勢を持っていた、という視点で論じている。といっても、公式的な論考ではなく、狂言に対する愛情と深く広範な読みとに支えられ、さらに民俗学への造詣の深さと相まって、自由無碍な論説となっている。Ⅱは、へ一つ舞台、だから違う狂言と能・狂言の舞台空間とは、など五章があって、現代舞台劇としての狂言の面白さを述べている。

『謡曲集一』（小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎著。小学館、五一七頁、五月）

日本古典文学全集の一冊（『謡曲集』は全二冊）。所収曲は曲趣別五番立分類に従って配列、脇能八曲、修羅物八曲、

三番目物十八曲と四番目物の(一)として六曲、計四十番。本文底本は寛永六年刊の観世流「寛永卯月本」を主として採用し(寛永卯月本にないものは明暦三年野田本△三曲)・擬軍屋本△嵐山△寛文末年以前刊下掛系本△二曲)を採用)、未刊本藤印紹介の役割も果すワキ・アイの詞章は下掛宝生流や大蔵流山本東本によって補足している。各曲の冒頭に、作者・主題・人物(役柄・扮装)・備考の項があり、写真一葉がある。本文は役ごとに改行され、小段・囃子・舞などの名称は従来の謡本の慣用語が採用され、文字遣いは一般通行の表記に統一し、謡の発音はカタカナの振り仮名を用いて判別できるようにする。本文を中心に、上段が語注など、下段が現代語訳になっている(本叢書の定型)。謡曲の口語訳は、修辭の關係でややもすると冗慢に流れがちであるが、本書では、原文に即した遂語訳に近い形をとりながら、次第や上歌に見られるくり返し部分も、一つ一つ訳し変えて冗長感をさけ、全体としてスッキリした丁寧な文体で抵抗なく読める。問答から掛ケ合い・地謡と続くあたりの訳文にも苦心のあとが見られ、すぐれた口語訳といえよう。一方、頭注などには、演出・演技に関する注・解説が多く舞台鑑賞に有効であろう。ただ、頭注語積がやや手薄になっているように見受けられ、現代語訳と有機的つながりが乏しいようにも感じられる。分担作業のむつかしさだと思われる。なお、能の歴史や謡曲についての要領を得た解説もある。

『連歌論集・能楽論集・俳論集』(伊地知鉄男・表章・栗山理一著。小学館、六二九頁、七月) 日本古典文学全集の一冊。風姿花伝(底本、奥儀まで宝山寺藏金春大夫家旧伝本、第六花修は世阿

弥自筆本・第七別紙口伝は吉田本)、花鏡(宝山寺藏永享九年貫氏書写本)、至花道(宝山寺藏金春大夫家旧伝本)、三道(吉田本)、拾玉得花(能研本)の五部を収める。本文を中心に、上段に語積など、下段に現代語訳をおく。本文は底本そのままではなく、校合結果による校訂本文を示し、表記その他も部分的に改訂し、読み易く、さらに本文の段落(改行)も従来の刊行本より多くされているために、世阿弥の論の展開がたどりやすくなっている。頭注は、所収書目内で関連するものほだけ一括しているが、それでもほとんど空きのないほど詳細になされ、しかも当時の猿楽の実態をふまえた新見が見られることに注意しておきたい。現代語訳も単なる言いかえでなく、頭注をふまえた上で、時にはかなり大胆に言葉を補って訳を試み、成果をあげている。現代語訳が、本文と同じ見開きに納まっていることも、校注者の苦心の見られるところで、読者にとって対比しやすく便利である。なお、至花道が花鏡よりあとに置かれているのは、著者の成立論に従ったものだが、本書が初めてである。

『未刊謡曲集三十一』(田中允編。古典文庫、二四二頁、八月)

京都下村家旧藏(現天理図書館蔵)本中の未刊曲四十三番を、五十音順に「阿具留王」から「公任」まで藤印紹介(付各曲解題)する。但し、そのうち「安達静」など十六曲が既刊曲の異本である。なお、下村本の解題は第二十四冊に所収する予定という。

『大蔵狂言集の研究』(池田広司・北原保雄著。表現社、四四〇頁、七月) 故笹野堅編『古本能狂言集』(写真複製版。原本は大蔵弥太郎氏現蔵)を三巻に分け、頭注・傍漢字等を付けて

翻印紹介したものの第二冊目。本冊は「鬼類・小名類」(三十八曲)、「女狂言之類」(三十三曲)、「出家座頭類」(三十五曲)の計一〇六曲を所収する。

『下間少進集I』(西野春雄校訂。わんや書店、二七四頁、四月)

法政大学能楽研究所設立二十周年記念事業の一環として企画された「能楽資料集成」刊行の第一冊。本願寺坊官ながら素人能役者として活躍した下間少進の能伝書『童舞抄』『舞台之図』および版本『舞台抄』を収める。能楽資料としてすでに声価の高いもので、前二者はかつて野々村戒三氏の『金春十七部集』に翻印または影印して紹介されたが、いま入手困難でもあり、他の少進関係伝書と共に本叢書の全三冊中に収められることとなった。底本解説・諸本解説が付されている。

『能への招待I』(文藤城継夫・写真亀田邦平。わんや書店、一五八頁、九月) わんや書店の新書判シリーズの一冊。なじみの深い能六十曲を選んで、梗概(舞台)と見どころ(鑑賞)とを舞台写真と共に紹介したもの。一曲につき二〜三頁だが、博識な著者の、多年にわたる観能経験からくる鑑賞のポイントが簡潔にまとめられている。各曲末尾に二〜四行で書かれた「メモ」も、興味深い話題を提供する。能楽鑑賞法とか歴史とかの概説めいた項目はなく、必要な要素は「鑑賞」「メモ」の中に入れられており、また曲目配列も五十音順で検索に便利である。ただ、写真図版に不鮮明なものもあって惜しまれるが、すぐれた鑑賞入門書である。

『日本の伝統芸能』(国立劇場監修。第一法規出版、三五七頁、九月) 雅楽・文楽・歌舞伎・邦楽・民俗芸能などと共に「能と

狂言」の一項がある。伝統芸能に親しむための入門書として編集されたもので、写真も豊富であり、文章も分りやすく絶好の入門書である。丸岡大二氏執筆。能と狂言・能舞台・能の種類(形式別や曲趣別の分類にふれる)・演者と諸役・扮装―面と装束・舞・能の歌詞―謡曲・能の音楽・能の演出・狂言・歴史と現状将来、など約四十頁分。

『古代中世芸術論集』(林屋辰三郎編。岩波書店、八一二頁、十月) 日本思想大系の一冊。十一世紀から十七世紀に至る芸能論書十五部を収めているもので、林屋辰三郎氏を中心とする共同研究による成果である。能・狂言関係は次の三種が所収されている。①禅鳳雑談。共同研究をもとに北川忠彦氏が校訂し頭注(付補注)を加え、守屋毅氏の解題がある。宝山寺藏本が底本。藤右衛門なる人物が、金春大夫禅鳳の談話を書きとめたもので、当時の演能の実態・役者の意識はいうにおよばず、茶道・華道など能以外の中世諸芸道との交渉交流をもくわしく知ることができるなど、能楽史料としての範囲をこえて価値を有する書物である。②八帖花伝書。中村保雄氏の校注(付補注)・解題。古活字版第一種本が底本。世阿弥伝書が世に出ない頃、室町末期から明治にいたるまで、能楽に大きな影響を与えて来た書物。その割には研究が立ち遅れていたが、今後に期待したい。③わらんべ草。北川忠彦氏校注・解題。底本は松平文庫本で、慶安四年奥書。大蔵虎明によって、狂言道ともいうべきものを確立すべく著述された書物で、狂言唯一の芸論書である。岩波文庫『わらんべ草』は、松平文庫本より約十年後の奥書を有する。三書ともに芸術論書としては深み

はないものの、それぞれが能・狂言の歴史研究などに不可欠の書であり、こうしてさらに読み易い形で提供されたことよって、研究に飛躍がみられるものと期待される。なお、林屋辰三郎氏の大局的立場からの解説「古代中世の芸術思想」があって、所収書目の位置付けをしておられる。

『狂言総覧―内容・構成・演出―』（安藤常次郎・三宅藤九郎・古川久・小林責著。能楽書林、四九〇頁、十一月）

狂言の舞台鑑賞に利用されることを目的とし、同時に入門書としての性格をも持たせて編集されたもので、曲目の総合的かつ簡潔な紹介を中心とする。和泉・大蔵両流の現行曲二六〇番の中から、作柄がすぐれ、上演頻度も高い曲を中心に一五〇番を選んで、各曲に役別装束付・道具付・内容・構想・演出・参考を記し、巻末に狂言演出用語解説・参考文献書目・曲目一覧・索引をそえ、さらに概説もあって、本書の目的は十分に達している。内容・構想ともに和泉流を主体とし、大蔵・鶯との相違を指摘し、読者の理解を助ける。中でも演出の項では、和泉流の現行演出によって、ほぼ時間的経過に従って書かれているが、演者の立場から説く型の要所や一曲の演出・演技上の要点、演者の心の持ちようなどの説明は、舞台鑑賞に大いに役立つ。なお、簡にして要を得た狂言概説と道具・持物類の読み方も付され、写真図版も多く、書名にふさわしい内容で、ゆきとどいているが、本書の目的を生かすためには、いままじしハンディなかたちの本にすべきではなかったか。この点が惜しまれる。

『細川五部伝書』（表章校訂。わんや書店、二七四頁、十二月）

能楽資料集成の第二冊。鴻山文庫蔵細川十部伝書のうちから五部を選んで翻印紹介したもの。①元亀慶長能見聞 ②能口伝之聞書 ③節章句秘伝之抄 ④大野本笛鼓伝書 ⑤申楽聞書、の五部を所収。①は元亀から慶長二年に至るまでの演能見聞記を主体とするもの、②は天正末年から慶長三年に至る間の能や謡に関する話の聞書（聞き手・筆録者は妙佐）を主体とするもの、③は主として謡伝書（他に能や音韻関係の伝書も）を合写したもので、所収本中の最も大冊。④は天文十五年、宮増弥左衛門から大野三郎へ宛てた笛鼓伝書。⑤は続群書類従にも収められているもの（本書のみ既刊本であるが良質の本文を有する故に加えた）。いずれも室町末期から近世初期にかけての、転換期における猿楽の実態とその変遷とを知るうえで、欠くことのできない能芸史料として貴重。校訂者による解説と曲名・人名・能楽関係語句の索引がある。

〔49年単行本〕（刊行順）

『能の美』（松田存著。鹿島研究所出版会、二〇三頁、一月）

舞台写真や図版資料を豊富に使って解説された入門書。能にみる古典の世界、能の歴史、能を支える人々、能面・能装束、舞台鑑賞、の八章からなるが、著者は能の作品の背景となる先行文芸に関心を寄せており、書名となっている能の美という点はあまり追求していない。

『カラー能の魅力』（文中村保雄・写真今駒清則。淡交社、二三四頁、三月） カラー写真を豊富に使って（八十一葉、すべてがカラー写真）、能の魅力とは何か、ということを探ったものだが、

同時に能楽鑑賞入門書としての性格を持っている。著者は、総合舞台芸術ともいべき能の、その一つ一つの要素を、意図的にバラバラにして、おのおのの本質の中の、何に魅力があるのか探ろうとしている。ために、能―歴史と曲目、役―神と人間、顔―面と表情、空―舞台と空間、時―過去と現在、音―囃子と謡、色―装束と道具、型―動と静、というユニークな標題を持つ八章から構成されているが、鑑賞に必要な事項は尽されている。

『狂言集成』(野々村戒三・安藤常次郎編。能楽書林、八四四頁、三月) 長らく絶版していたものの写真復刻版。南大路家旧蔵の和泉流狂言本が底本で、現行曲・番外曲はもとより、間狂言をも含めている点に意義がある。能・狂言研究者にとって必携の書であっただけに、この複製本刊行はありがたい。

『狂言史研究』(小林責著。わんや書店、三二二頁、四月)

小林責氏の永年にわたる研究成果をまとめたもので、流派の成立と狂言役者の事績の解明を中心内容としている。全体は自ら二部に分かたれるが、その一は室町末期から江戸時代前期をあつかった、①狂言大蔵流の成立、②鶯流の成立と仁右衛門宗玄、③手猿楽山脇和泉家と和泉流の成立、④「鳥取池田藩芸能記録の発掘」に現われた狂言、の四篇からなる。流派成立に関しては、各流家元伝来の系図・先祖書等に周辺の資料を援用しつつ、流儀の成立事情と家系・芸系を実証的に明らかにしようとするが、②③が比較的資料にも恵まれ、結論も説得力があり読みごたえがある。④は鳥取藩資料からの考察で、江戸とは違った京都能楽園の存在を想定しているが、さらに発展させてほしい。その第二は、明治以後の

近代狂言史で、⑤狂言明治百年、⑥明治以後における狂言芸風の変遷、⑦大蔵宗家の廃絶、⑧明治維新後衰微期の狂言師たち、⑨東京和泉流の開拓者、⑩鶯流滅亡の一因、⑪三宅庄市のこと、⑫野村与作のこと、⑬三宅惣三郎のこと、⑭野村万斎のこと、⑮野村家二十年、となっていて、⑩以下は⑤⑧⑨に対応する人物評伝ともいべき論考。維新から今日までの、混乱から再生・隆盛にいたる歴史を、力篇⑤を中心に詳述する。狂言史研究の好著を得たが、江戸初期から明治まで、その間論述されていない期間もまた長い。一日も早くこの空白期を埋めていただくよう希望してきたい。

『能面』(観世寿夫・石元泰博著。平凡社、二四頁、四月)

平凡社ギャラリーの中の一冊。小面(越智作)、増女(出自是閑作)、孫次郎(竜右衛門作)など16面をカラー写真で収めている。写真の視角や明度も適切だが、扮装した演者のつけた面をアップして撮影するなど、従来あまり試みられなかった工夫がこらされ、成功している。巻頭に観世寿夫氏の「面とともに」という文章がある。能の役づくりには能面がどのようにかわりを持つか、ということを中心に、能面の歴史と作者・能面の類別などにふれており、文章は簡潔を旨としながら、背後にある筆者の演者としての目と能面に対する愛情とが感じられるすぐれたエッセイである。

『未刊謡曲集三十三』(田中允編。古典文庫、二五二・二四四頁、五・十月) 両冊ともに京都下村家旧蔵本(天理図書館現蔵)未刊曲を翻印紹介(付各曲解題)する。第二十二冊は「草津」から「館尾」まで三十六曲(五十音順。但し「楠花櫓」など二十一曲

は既刊曲の異本)を、第二十三冊は「種尾」から「星」まで四十曲(同前。「玉嶋川」など十七番は既刊曲の異本)をそれぞれ所収する。なお、両冊所収曲のうち、「塩籠・麩の端・神草以上三十三冊の分、玉嶋川二十三冊の分」には間狂言が付されている。

『世阿弥 禅竹』(表章・加藤周一著。岩波書店、五二八頁、六月) 日本思想大系の一冊。共著となっているが、加藤氏の解説をのぞくと、本文校注・解題・補注などすべて表氏の執筆。世阿弥の部は、能本をのぞく能芸論書・芸談その他すべて二十一部と書状二通を収め、禅竹の部は、六輪一露之記(付二花一輪)・六輪一露之記注・歌舞髓脳記・五音三曲集・幽玄三輪・六輪一露秘注(二種)・明宿集・至道要抄という主要九伝書を収める。頭注・補注は世阿弥の部にのみだが、語釈・通釈・出典・他伝書との関係などを記し、さらに各節毎の内容が要約されている。古典文学大系本の頭注欄に比してスペースが少ないうえに、語句そのものを掲出して注をつけるため、注そのものの項目は少ないが、各伝書間の関連項目を一括し、加えて八四頁におよぶ詳細な補注(一八〇項目)と校訂附記とによって、必要にして十分な注解が加えられている。補注は、先行注釈書や能楽論研究書はもちろん近刊の雑誌論文等まで引きながら検討し、時には世阿弥能芸論の成立過程・増補改訂の問題から、語彙・文体の特徴にも言及し、新見が多い。これら頭注・補注に見られる成果は、巻末の解説や書目解題に示されている、多年にわたる基礎的作業(諸本の調査・校合と本文校訂)によって得られた読みの深さと、能の歴史に対する知識からもたらされたものであろう。世阿弥関係書の全部と禅竹

の主要伝書が一冊に収められた便利さと、当代の最高水準の注釈書が得られたといつてよい。なお加藤氏の解説「世阿弥の戦術または能楽論」は、すぐれた、示唆に富むものである。

『世阿弥の能芸論』(西尾実著。岩波書店、五〇四頁、六月)

五十有余年の長きにわたって世阿弥研究を続けられ、常に第一線にあって活躍してこられた西尾実先生の論文集。昭和三年から十八年までの、世阿弥能芸論を一篇々々探求してきた足跡を示す論文十三篇を第二部に、昭和26年以後最近に至る主要論文七篇を第三部として収め、そして著者の研究方法と態度と問題についての総括ともいべき新稿「世阿弥の人と芸術」が巻頭、第一部をなしている。これまで、存在は知っていても、なかなか読むことのできなかつた初期の論文が収められ、先に刊行されている諸論文集と並べることによって、西尾先生の能芸論のすべてに接することができるようになった。そして、われわれは、常に研究の先端を歩まれた先生の研究の軌跡をたどる——それはまた能芸論研究の展開をもたどるのだが——ことができ、本書の刊行はそういう意味でも喜ばしい。「広い視野から人間研究を進める」ことを願って、世阿弥と取りくんでこられた熱意が、最新稿でも若々しくほとばしっており、年令を感じさせないが、今後なお後進への鞭撻を願っておきたい。

『狂言鑑賞のために』(吉越立雄・羽田昶。保育社、一五二頁、九月)

保育社カラーボックスの一冊で、先に出た『能』と対になるもの。96頁にわたる舞台写真の撮影と解説は吉越氏、本文は羽田氏の執筆。本文は、①狂言の歩み ②狂言の戯曲 ③狂言の

おもしろさ ④狂言の演技と演出 ⑤狂言の現況・参考書など、の五項にわたるが、読みやすい文章で実際的内容を中心に書かれ、狂言の舞台鑑賞に必要なものは尽くされている。中でも③には、羽田氏のフレッシュな狂言観が良く出ている。狂言が関心を持つてむかえられている時、文庫本という小冊子ではあるが良き入門書を得たことは嬉しい。

『謡曲作者の研究』(小林静雄著。能楽書林、二九六頁、九月)

長い間絶版だったものの写真復刊本。能楽史研究に不滅の業績を残した小林氏の著書の中でも、最も高い評価を得ているもので、謡曲作者に関する研究の先駆的役割を果し、しかもいまなお現役として読まれるべき書。誤植・誤脱が訂正されて復刊。

『下間少進集Ⅱ』(古川久校訂。わんや書店、二七四頁、十月)

能楽資料集の第三冊。少進集の第二冊として、①炭蓮江間日記、②少進聞書、③少進能伝書の三書を収める。底本は三書とも能楽研究所蔵本。①は、少進が師匠の炭蓮から相伝を予約された曲について約一年間に学得したことを、随時記録したもので、少進伝書として最も成立の早いもの。②は観世与左・炭蓮・道知・一噌・牛尾などからの聞書、③は、「童舞抄」と並んで少進型付の代表ともいべきもので、いづれも資料的価値が高い、②はかつて野々村戒三編『金春十七部集』に「聞書」の名前で翻印されたが、他の二書は未刻の資料。詳細な解説がある。

『夏に技 冬に声』(野村万蔵著。新潮社、二三九頁、十月)

当代最高の演者の一人である著者の、若き日のことから、近年の外遊中の見聞まで、著者の主宰する会誌等に発表したものを集

成した随筆集。所収の文の一つ一つは比較的短いし、一部は旧著からの再録であるが、著者の世代の稽古修行のありさま、著者の目にふれた先人たちの芸風や面影、著者の趣味などが適確にえがかれていて、楽しい読み物になっている。同時に、恵まれなかった時代に、能・狂言に打ちこんできた役者やその後援者たちの姿をほうふつさせる点で、歴史の証言としても重要な書といえる。長老たちの、こうした書物が多く出ることを期待したい。

『日本庶民文化史料集成第二巻田楽 猿楽』(芸能史研究会編。三

一書房、七八九頁、十二月) 田楽・猿楽を中心にして、延年・風流・語り物・地方芸能に関する未刊の記録・資料を、詳細な解題と概説とを付して翻印紹介したものである。後に掲げるように多くの記録・資料が、一書にまとめられた訳だが、芸能史研究のために、また当代の芸能の意義や実態を知るためにも、必読かつ精読すべき文献ばかりである。所収文献名は以下に記す通り。

第一部 祭禮と勧進記録(春日臨時祭芸能記録・春日若宮拝殿方諸日記・春日若宮御祭田楽頭役日記・東大寺転害会執行日記・文永七年内山永久寺鎮守造宮日記・石清水八幡宮宮寺并極楽寺恒例仏神事惣次第・住吉太神宮諸神事次第・周防国仁平寺興隆寺本堂供養日記・山城神事芸能史料・勧進猿楽記録・長浜八幡宮勧進記録・春日若宮御祭出勤田楽座記録・美麗田楽座史料・若狭猿楽座記録・伊勢猿楽座記録)▽

第二部 中世芸能の諸相(〔延年〕南都延年史料・熊野権現延年史料・小迫延年資料・身延山延年資料・美濃長滝延年資料・日光山延年史料・毛越寺延年資料・中尊寺延年資料・今様之書・〔風流〕

桂川地藏記・豊国大明神臨時御祭礼記録・祇園会旧記・祇園会細記・〔語り物〕正法輪藏・座中天文物語・大和地神座頭記録・平家座頭仏説座頭諍論御裁許・千秋万歳唄・大江幸若舞文書、和州上深川題目立詞章▽

第三部 地方に生きる芸能へ遠州西浦の田楽・三州古戸の田楽・信州新野二善寺観音御祭事・三州鳳来寺の田楽・三州田峯の田楽・三州黒倉の田楽・三州四谷の田楽・三州黒沢のおこない・遠州寺野おこない・遠州神沢のおこない・遠州懐山のおこない・遠州川名薬師堂おこない・遠州法多山の田遊び・駿州田代の翁と小冠者・駿州日向田遊び詞章・駿州滝沢の田遊び・駿州藤守の田遊び・越前水海のあま田楽・播州上鴨川の翁舞・土州吉良川の御田祭▽

本巻の責任編集者は植木行宣・森修・山路興造の三氏。解題・校注の担当は上記三氏に加えて、永島福太郎・和田義昭・森末義彰・谷川信幸・小沢弘・後藤淑・伊東久之・新城敏男・本田安次・宮垣克己・川口久雄・坂口弘之・杉山博・盛田嘉徳の諸氏。

『東岳院様能楽余香』上・中・下（米沢金剛会編刊。十二月）

米沢上杉家に所蔵されている能楽資料を、写真版とその翻字をそえて刊行したもの。所収書目は以下に記すが、翻字の部に誤植・誤校の類が少くないのは惜しまれる。上巻（風姿花伝第一～五。九一頁）中巻（口伝書一・二。一一九頁）下巻（禮脇之事・秘伝之抜書・金春宗固^{すくも}袖之下下巻・脇能之事・作之面之事（一）・一調之覚・置名立・舞台図其外聞書・乱舞聞書・道成寺・舞台図・カメのふせ様・能道具目録・上杉家蔵謡本一覽・上杉家蔵能面・補稿。二八〇頁）

〔48年雑誌論文、その他〕

まず服部幸雄氏「後戸の神―芸能神信仰に関する一考察―」（文学、七月）。世阿弥の『風姿花伝』第四神儀の中に見える「後戸」に着目し、そこから芸能全般の問題として考察をすすめ、「後戸」だけが持っていたはずの特殊な意義と、なぜ猿楽者たちの伝承が「後戸」に固執したのか、と問う。そして、諸寺院の「後戸」が「うしろどのさるがう」と称され、降魔除魔の秘密の行事を執行する場所と規定されていたことを確かめ、後戸が単に、後方の出入口といった文字上の意味を超えた存在で、何か神秘的な神、祕すべきであるゆえに、その強力な霊の発動を惧れねばならぬと観念される秘仏が祀られていたことを検証し、「花伝神儀」の仏在所における猿楽縁起と称する説話が、実は権威ある寺院の「後戸」で演じた古猿楽の実相の伝承を、祇園精舎に仮託し創作したものに違いない、とする。さらに、「後戸」に秘されていたと考えられる秘仏の本体は、天台系寺院の常行堂守護神として祀られていた摩多羅神であって、日本で諸寺院に奉祀されてのち、比較的早く、舞楽、古猿楽ないし延年系統の芸能の芸能を背景に置き、歌舞芸能の神としての性格を付与されていた。世阿弥はすでに、その真意は解さなかったが、猿楽の古態が「後戸」の神に奉納された記憶を、円満井座に伝わる伝説の中にとどめていた、と結論する。これまで、典拠も不明で創作ではないかと判断され、放置されたままになっていた仏在所猿楽起源伝説の中の、特には意味もないかのような「後戸」の語の背景に、こうした信仰があったことを

明らかにした、服部氏の功績は大きい。氏が解明された摩多羅神信仰は、翁猿楽信仰や、金春禪竹の力説する宿神の信仰とも密接に関連するものである。今後、こうした方面の一層の究明を期待したい。

雑誌「文学」七月号はほかに、西野春雄氏「元雅の能」、金井清光氏「酒もりの狂言」、座談会「能楽研究の展望」（横道萬里雄氏、表章氏、北川忠彦氏、司会増田正造氏）がある。西野氏は、元雅の作品について、従来から確実視されている諸作品を概観した上で、「朝長」「維盛」「経盛」についても、元雅の作品ではないかとの説を出す。これら三作は、世阿弥が完成した歌舞能の類型、技法を脱し、自由な構想と卓抜な脚色と詩才とをもって、独自の世界を創造しようとした元雅の特色がある、という。やや大ぶりの論のすすめ方で、部分的には異論もあるが、かなり可能性は高いように思われる。さらに検討を加えて、より確実な作者考定を望みたい。

金井氏の論考は、狂言の中の酒もりは神になる資格を持たない狂言役者が、「舞を舞うために興奮状態におちいる手段」で、その歌舞は神事芸能としての狂言の核をなす部分だった。しかし、酒もりの場面を持つ多くの狂言は、酒宴の歌舞を軽視し、歌舞の前後にセリフや物まねなど筋を展開させて、近世的理知的な筋書本位の狂言に変貌していった、とするもので、その実例を「木六駄」などに見ようとす。酒宴の場面だけで一曲が構成されている狂言もたしかにあるし、酒宴の場における歌舞が一曲の原形だった、という場合もあるだろうが、酒もりの狂言のすべてが、金

井氏のいうように変貌したかどうか。酒宴の場の方が、あとから取り込まれたという例もあると思われる。「木六駄」の場合も、議論のあるところだと思ふ。なお、金井氏には「田遊びの狂言」（国語と国文学、八月）、「狂言の物づくし」（鳥取大学教育学部研究報告人文科学二四一一、六月）があつて、いづれも神事芸能としての狂言、また豊作豊胤を祈り祝う呪術性の強い歌舞・歌謡と狂言（の原形）との関係に強い関心を寄せておられる。それぞれに示唆に富む論考である。

研究論文ではないが、今日の能・狂言研究の先端をゆく四氏による座談会も興味深いものであつた。巨視的と微視的・共同研究の必要・技術研究のことなど、能・狂言および謡曲等の研究について、広範な問題にわたつて語り合っているが、示唆に富むものであることを指摘しておきたい。

堀口康生氏「手猿楽洪谷の二百年（前）（後）」（芸能史研究413、四・十月）も力作である。文明年間以後多く輩出してきた手猿楽のなかでも、最も有力な家柄で、寛永年中まで二百年の長きにわたつて手猿楽界をリードしてきた洪谷一党に関する綿密な歴史研究。堀口氏は、洪谷二百年の歴史を寛永期以前と以後とに大きく分け、さらに以前を（一）万左衛門・清庵時代（二）草創・芸団確立期（延徳・享徳）（三）宗雲・常庵時代（四）地方下向時代（天文・天正）（五）与兵衛とその子の時代（六）禁裏御能大夫（慶長・寛永）の三期に分けて考察する。決して恵まれているとはいえない洪谷関係史料を実にたんねんに博搜し、延徳年間から天正・文禄・慶長という激動期を経て寛永年間にいたるまでの手猿楽洪谷の実態がかなりは

つきりさせられている。手がたい論考はいうまでもないが、附載の渋谷年譜史料は実に貴重なものだ。採集の労に対して敬意を表したい。

八嶋正治氏「世阿弥における修羅の系譜―その演劇的性格に触れて―」(芸能史研究43、十月)は、軍体能の検討を通して、「世阿弥修羅能に於ける典型が『忠度』『頼政』によって頂点」となり、「実盛」を加えた三曲は、女能「井筒」の「後場が、人称の変化によって劇性を形造って居る」点で同じ構造であることを指摘し、その人称の変化をさせるといふ「方法は、世阿弥自身自覚して用いた方法と見てよい」とする。軍体能もすぐれた抒情性と劇性とをひそめており、そのゆきつく究極は「井筒」である、という八嶋氏の主張がみられる。労作ではあるが、修羅能検討の過程でやや煩瑣に陥るところがあり、主題を見失うおそれもある。同じく八嶋氏「修羅と哀傷」(観世、十二月)は、同様のテーマを世阿弥能楽論の側から論述しており、一体をなすもの。

伊藤正義氏「吉田本風姿花伝考」(人文研究25ノ七、十二月)。
昭和20年代まで風姿花伝の主流本文の位置にあった吉田本は、宝山寺蔵金春大夫家旧蔵本が発見され、善本であるとの評価を得て、岩波書店の日本古典文学大系、小学館の日本古典文学全集などの底本として採用されるにおよんで、近年は一異本として校合に用いられるにとどまっている。そこで当面、金春本は善本なのか、宗節署名本なり吉田本なりが、金春本に比してその本文がよくないのか否かなど、主要三本の本文的位置づけがなされねばならず、諸伝本の検討をふまえ、しかも単なる校合作業を超えるところで、

世阿弥により近づく復原校訂本文が目標となり、ここで「諸伝本相互の本文的位置の確認」をするという。吉田本・田中允氏本・元章注入本・伊藤氏本の四本の異文一覧によって、吉田本系本文の特徴を求める作業をしている。諸伝本の本文的位置付けという仕事は、伝書研究において最も基礎的なことからであるにもかかわらず、これまでないがしろにされて来たものである。今後はさらに多くの者が参加してゆくべき課題であろう。

伝書ということでは、竹本幹夫氏「安田本花鏡について(一)(二)(三)」(宝生、九・十・十一月)がある。長い間その所在が知られなかった安田文庫旧蔵本花鏡が、早稲田大学演劇博物館へ入っていたことを発見し、その書誌などを報告している。安田本の書写者を観世元章と推定したうえで、その書写事情、親本(大藏庄左衛門本)および吉田本系諸本との関連、川瀬氏麟印本(雑誌『椎園』第三輯)との校異などにふれている。適確で、要を得た紹介となっている。この考察と関連するものとして、竹本氏には「元章の世阿弥伝書書写活動について」(能研究と評論2、七月)もあり、「宝生」論文の補遺ともいべきものである。

先年、江島伊兵衛氏が「新出本「五音下」その他」を発表(文学、38年一月)して注目を浴びたが、これら十冊の原写本を鈔写して所持していた妙庵なる人物について、中村格氏「妙庵細川幸隆について(その一・二)―安土・桃山期の能伝承者―」(宝生、七・八月)が考証している。妙庵は、細川幽斎の三男で、観世大夫左近身愛に教えを受けて能に精通していたらしく、「細川十部伝書」はもと二十冊ほどの写本で、慶長三年前後、妙庵によって鈔写され

たものが多く、いくつかは妙庵自身座右の書として親しんでいたらしいことは明らかにされている。そうした妙庵を、たんに細川家の能の伝承者としてだけでなく、安土桃山期における能楽研究の上で見落してはならぬ人物として考証する。49年二月号掲載のその三で完結。

島津忠夫氏「連歌と謡曲」(観世、六月)。まず「謡曲作者の和歌的教養が、地下連歌師の知識と共通するものである」と指摘して、「三井寺」に二条良基の連歌の発句にもとづく所が二か所あることは、この曲を世阿弥作と見なす可能性あり、としたうえで、「三井寺」は「作者が世阿弥でなかったにしても、良基あるいは『石山百韻』の連衆に親炙した人の作である」ことは云えるとする。そして、「三井寺」中の「従来、出典未詳とされた歌が、連歌師の備考のためとも云える私撰集に見出だされることは、謡曲の作詞に当って用いた資料が、地下連歌師の一座のさばきに備えて用意した資料と共通していたことを知る」という。

伊藤正義氏「謡曲の和歌的基盤」(観世、八月)。謡曲と和歌とを問題にする時には、「歌学の流れの中で、和歌意識あるいは和歌的基盤といった面までを包みこんだ、広い意味での和歌史を見渡して、そこから謡曲との関わりを考え」るべきだ、として、古今注『三流抄』のいう七月七日の夜のかささぎの橋の説と「善知鳥」との関連をみて、「善知鳥」には七夕と関連する物は全くないにもかかわらず、「もみぢの橋のかささぎを出すことによって、それが表現されるのは、やはり七夕―鳥鵲の橋―紅葉の橋―紅という連想が一つのパターンとして了解される背景があったと考え

ねばならず、その淵源は古今注であり、室町期においては、和歌の世界での一つの知識といえる」とする。また、「杜若」は伊勢物語の複雑な解釈をふまえて一曲が構想されているが、そのことは「作者のうちには、伊勢物語そのものの十分行き届いた中世的理解があり、それをふまえてはじめてなし得」るものだ。伊勢物語の講釈・伝授を受けたほどの者でなければならぬが、はたして能役者の誰か。あるいは能役者の周辺の知識人であろうか、という。知識人作能の例も上げておられる。

右の二篇の論考は、謡曲作者の背後には、中世の大きな歌学的和歌的基盤があったことを指摘し、そこを無視することの危険性を述べ、さらに謡曲作者として当代知識人たちの存在にも気を配るべきことを力説する。二篇ともに紙幅の関係で詳論されてはいないが、同じ趣旨のことを両氏ともに述べられたことがあり、謡曲を文学作品として論じ、広く中世文芸史上に位置づけようとする時、欠くことのできない視点であることはいうまでもない。こうした観点に立った謡曲研究の進展が切望される。

徳江元正氏『善知鳥論上』(国学院雑誌、十一月)は、「善知鳥」について、この曲の構想がどのような説話を素材としたかを考えたもの。この殺生戒にまつわる因果応報のはなしの典拠として、すでに指摘されているもののほかに、「能大成以前からかなり人気を得てゐたと考えられる説話の一つの型に、仮に『片袖幽霊譚』とでも命名してしかるべきものが」存在したのであり、ここから「善知鳥」を、説話の世界の中で位置づけることもできるとしている。今回は、大阪大念仏寺蔵絵巻・『奇異雑談集』巻

第一第一話・『鹿苑日録』明応七年正月三日条所引小話・『清涼寺縁起』所引説話など、〈片袖幽霊譚〉の類話をあげ、「善知鳥」との類似性を指摘している。説話研究に造詣の深い徳江氏の、きわめて示唆に富む論考である。

雑誌「観世」誌上では、隔月に作品研究が掲載されているが、八嶋氏「難波」(一月)、松田存氏「胡蝶」(三月)、竹本幹夫氏「盛久」(五月)、佐藤健一郎氏「半菰」(七月)、西野春雄氏「江口」(九月)、小田幸子氏「善知鳥」(十一月)があつて、それぞれ特色を出しているが、中では、西野氏の論考を興味深く読んだ。なお、八嶋氏には「江口の周辺」(宝生、六月)もある。

後藤淑氏「翁の『とうとうたらり』」(演劇研究六、六月)は、興味深く読むことができた。現在、民俗芸能の中で行なわれている翁と五流の能の翁とを比較し、民俗芸能の翁には「とうとうたらり云々」の文句がないことを指摘し、さらに両方の翁は時を同じくして発生しながら、系統を異にしたまま長期間別々に存在していたことから、問題の文句は「太鼓・笛の譜ではなかったか」とする。もしそうでないならば、「翁が大和猿楽の間で育」つうちに宗教方面の影響を受けて、つけ加えられたものではないか、という。太鼓・笛の譜ではなかったかとする、後藤氏の説は、かなり可能性が高いように思う。さらに究明を望みたい。

横道萬里雄氏・松本雅氏「能の現行小書」(芸能の科学4)。能の特殊演出の名称を示す小書は、流派による有無や名称・表記に異同があるなどきわめて繁雑である。しかも能の鑑賞や演出の研究には欠くことのできない知識でもあつて、有効な解説書の出現

が期待されていたのだが、横道・松本両氏の緻密な仕事によって、われわれは小書に関する優れた解説書を得ることになった。各流派の謡本・名寄・小書一覧を基礎資料とし、諸氏執筆の解説書等を参照して、本文たる小書一覧が作られた。付表として小書名の読み方・替エの諸相、がある。実に煩瑣なものを、これだけ手際良く整理されたのは、両氏の確固たる〈目〉によって始めて可能となったと思われる。感謝しておきたい。

文献の繚印紹介として、「謡秘伝抄」(演劇研究六、六月)があつた。開口・立合・自家伝抄・十躰之次第・鬨曲などの諸書が合写されたもので、底本は安田文庫旧蔵、早稲田大学演劇博物館現蔵。奥書は「天文武年正月十九日精原弥介入道一覽」とあつて、木崎治部丞殿にあてたもの。斉藤香村氏が「文学」四巻四号で紹介している。田中允氏は、小汀文庫旧蔵本古版本「間狂言」の繚印紹介(第一回目)をしておられる(青山語文三号、三月)。間狂言の本文は活字化されることが少ないだけに、完結がまたれる。「観世宗家所蔵文書目録(付解題)」(観世、一月・七月、九月・十一月)は表章氏の執筆。前年から続き。一月・四月は室町期諸文書、同じく四月・七月、九月・十一月は室町期上掛り謡本について解題している。

演能団体のパンフレットに掲載されたものでは、おもてあきらの氏の「鍔之丞家の代々」を注意しておきたい。前年からの続きで、「鍔仙」の六・七・十・十一月に掲載。六月の二代紅雪から十一月の六代華雪までで完結。わづか六枚程度の分量ながら読みごたえはある。

〔49年雑誌論文、その他〕

表章氏「多武峰の猿楽」(能楽研究一号、十月)。猿楽界の主流であった大和猿楽と極めて深い関係を持っていた多武峰の猿楽については、そこで演じられた能が特異な性質を持つものであった事実など、若干は知られていたものの、多武峰と大和猿楽の具体的なつながりや、その能の実体については、不明な点がきわめて多かった。表氏の論考は、多武峰猿楽の実体を大和猿楽四座との交渉を明らかにしつつ究明し、さらに多武峰猿楽と大和猿楽の歴史的關係など追求し、明らかにしたものである。一、多武峰八講猿楽 二、八講猿楽への四座参勤の状況 三、多武峰様具足能 四、八講猿楽の新作能鏡演の風習 五、(翁)の法会之舞 六、多武峰の六十六番猿楽 七、大和猿楽と多武峰 八、多武峰の猿楽補任権をめぐって 結び という全体の構成を見ても分るように、多武峰猿楽と大和猿楽四座との密接な、そして多様な関係をおしはかることが出来る。『談山神社文書』所収の諸文書をはじめとする公刊された諸史料はもとより、興福寺関係諸史料(多武峰について言及することが多い)、および能役者の側の諸文書・伝承にいたるまで、可能なかぎりの資料を収集し、すでに既知の文献についても新しく読みなおしを試みるなど、多大の努力を傾注して得られた見事な成果に対して、心から敬意を表したい。49年の最大の収穫の一つであることは疑いない。

香西精氏「観阿弥生国論再検」(能楽研究一号、十月)。観阿弥の生国、というより観阿弥ら三兄弟の母胎であった山田猿楽の所

在地は、能勢朝次氏のいう大和国なのか、小林静雄氏に代表され今日もなお根強く主張される伊賀なのか、という点についての再検討の論。香西氏は、小林氏の『謡曲作者の研究』などに示されている観阿弥出生伊賀説、山田猿楽伊賀説の根拠となった、宜竹和尚の真贋『観世小次郎信光画像賛』の説が、いわば系図買いまたは系図作りにも通ずる信頼のおけないものであることを論証し、それに全面的に依拠した小林説を否定する。次いで、香西氏は、『申楽談儀』二十三段で観阿弥の出自を検討する。結果は、『申楽談儀』で山田猿楽が大和の猿楽の話の中に見えていること、山田猿楽の後身が出合座であり、出合は大和香久山付近の地名であること、その他の諸条件を考慮すれば、山田猿楽は、はじめから大和猿楽の古い一座であったとする。香西氏の原典に対する読みの深さには、いつものことながら敬服せざるを得ない。この論文でも『談儀』二十三段で新しい読みを提唱しておられるが、いづれも説得力がある。新しい読みといえ、香西氏は雑誌「宝生」誌上の「世子参究」シリーズで、世阿弥伝書の解釈上問題となる点を取り上げて論じてもおられる。『は』、『わ』の説(二月)、『片仮名と平仮名』(三月)、『神の御前』(五月・六月)、『隅田川子方論』(十一月・十二月)の四篇が六か月にわたって掲載された。しばらくの病臥のあとで、いわば再起ともいえるべきであろうが、読みの深さや優れた直観力などいささかもおとろえていない。ご自愛されて、長く書き続けていただきたいと思う。

横道萬里雄氏「能における『越天楽今様』の撮取」(芸能の科学5)。能「梅枝」と「絃上」の「梅がえだにこそ、鶯は巢をくへ、

風吹かばいかにせん、花に宿る鶯」という詞章の部分のフシは、
 雅楽の管絃曲「平調ノ越天楽」を、ほとんどそのまま取り入れた
 ものであることを証明したものの。一、管絃「越天楽」の原曲と渡
 シ物 二、管絃「越天楽」の楽式と旋律 三、「越天楽今様」の
 諸例とその調子 四、「越天楽今様」の楽式 五、能「梅枝」「絃
 上」の成立と改変 六、能の「梅がえだに」部分の曲節の復原
 七、能における曲節の「本歌取り」、以上七節にわたって論証す
 るのだが、一〇四は、「越天楽」「越天楽今様」に關し、その成立
 と形式について考察する。五は、『平調ノ越天楽今様』の能への
 撰取が、一六世紀前半までに行なわれたということ」を論証し、
 六では、「梅がえだに」の旋律と拍子当タリを復原し、それが
 「平調ノ越天楽今様」と一致し、実はそのものであったことを示
 し、七において、能・狂言の小段のうち、早歌・平家・小歌・風
 流踊・声明・乱拍子などの「本歌取り」を示し、これらが総じて
 「能化」して原曲から遠ざかっているのに、「梅枝」「絃上」の場
 合は「平調ノ越天楽今様」が生そのまま残っている稀有な例である、
 としている。以上の紹介でも分るように、謡曲とその周辺の芸能
 に関する音楽理論を縦横に駆使しての論考で、われわれのなかな
 か入りこめない分野での実証的研究は、まさに横道氏の独壇場で
 ある。困難な問題を含む研究対象であるだけに、正面から取り組
 む研究者も極めて少ない。こうした音楽の歴史的研究を今後もし
 ードされ、大いに進展させていただきたいと思う。

山路興造氏「もう一つの猿楽能―修養の持ち伝えたる能について―」(芸
 能史研究44、一月)も、示唆に富んだ論考である。観阿弥・世阿

弥大成以後の近畿諸座の猿楽能ではなく、大成以前の猿楽、また
 は近畿地方の大成とは別に、他の芸能集団が持ち続けていたもう
 一つの猿楽能の芸能を、いま残存している民俗芸能資料によって
 考察しようとしたもの。西浦田楽のはね能・出雲流神楽の能・備
 後東城栃木家文書の能・特色ある名乗りの一句・栃木家能本に残
 された能の様式・山伏神楽・番楽に残された能の様式・各地の能
 の比較・まとめにかえて、という順序で論述するが、精力的に各
 地をめぐって調査された資料によって、手がたくまどめておられ
 る。名のりの言葉に注目すると、日本のかなり広い範囲の能が、
 非常に近似したものである、という指摘は有意義で、そこを追求
 することが、そのまま「中世期にこれらの芸能をもち運んだ者達
 の考察」をすることになるのである。そして、「これまで分類を
 試みた地方伝承の能の様式を、大成後の能の様式と比較すること
 により、大成以前の能が持っていた様式を考えてみる事が出来
 る」とするのもそうだと思う。ところで、山路氏が紹介した特色
 ある名乗りの一句の中には、現行能「葵上」のシテがワキに名を
 問われて、クドキの形で「只今梓の弓の音に、引かれて現れ出で
 たるをば、いかなる者とか思し召す。これは六条の御息所の怨霊
 なり」と名乗るとそっくりな、山伏神楽の名乗りが紹介されて
 いて興味深い。表氏もすでにのべていられる(観世、八月号)よ
 うに、「葵上」の名乗りの形態と各地の山伏神楽能の名乗りとは、
 同根のものと同められるのである。四座の能の中にも、もう一つ
 の能と意外に近いものがあるのかもしれない。

石黒吉次郎氏「田楽の芸風と観阿弥・世阿弥―「花」「謡文」に關

連して―(国語と国文学、十一月)は、「一忠に関する花伝・三道・談儀の批評の齟齬を軸に、田楽の名人一忠と観阿弥・世阿弥父子の受容の仕方を追って、この期の芸能史状況の変化の一面を」見たものであるが、「花伝」「談儀」などから、当時の猿楽・田楽の実態を読みとろうとする氏の視点は、必要かつ有効であろう。

伊藤正義氏「花伝本文校訂私見五題」(人文研究26ノ三、十月)は、『世阿弥十六部集』をはじめとする翻印花伝本文中で、伊藤氏が問題ありと思われる部分をとりあげ、校訂上の見解をのべており、五か所を問題にしているが、いずれも妥当な見解であろう。

八嶋正治氏「『空輪』と『閑曲』―禅竹的なるもの一斑について(一)(二)―(宝生、八月・九月)は、世阿弥の論書にはなく、禅竹に至って初めて明確に論及されるようになった「稚き体」の解明を心がけたもので、論題の通り空輪と閑曲との追究を軸に論じている。

次に作品研究についてふれておきたい。

前年の分でもふれたが、徳江元正氏「善知鳥」論下(国学院雑誌、四月)が出て、二回で完結した。前回に続いて、〈片袖幽霊譚〉と「善知鳥」とを詳細に分析したうえで、「善知鳥」は「口承に依る〈片袖幽霊譚〉と、当時の極く普遍的な民間習俗とをこもこも採り入れ、それに、みちのくの歌枕に附与されていた、説話的背景を持つよほど山緒ある和歌をなひませにして、構想したものであった」としておられる。素材に中心をおいての論考であるが、能を中心にすえて、文献資料と民俗資料とを交錯させた試みは成功したといえよう。

中村格氏「松風」の変貌―室町末期諸伝本を中心に―(言語と文芸七

八号、五月)。副題にある通り、「松風」の諸伝本を比較し、室町末期には大よそ現在の掛り・下掛り両様の様式に分れていたことを指摘し、演出に関する諸文献によって、「松風」の変遷の過程を、総合的にたどった労作。

雑誌「日本文学」十一月号が謡曲作品論を特集している。

八嶋正治氏「加茂」の来歴―禅竹作能をめぐって―、中村格氏「清経」論―本説と劇的性格にふれて―、山木ユリ「忠度」・「実盛」の構造的特色―その構想力と構想観について―、小林保治氏「兼平」鑑賞、塚本康彦氏「禅竹能覚書」―芭蕉に則して―、松田存氏「班女」と「隅田川」の成立をめぐって、伊藤博之氏「鶺鴒」の七篇。各氏がそれぞれ持ち味を生かし、特徴ある論考であるが、特に伊藤博之氏の「中世的な罪業観と人間の生活の営みとの乖離を正面から見据える冷徹な目が働いている」とする「鶺鴒」論を、最も興味深く読ませてもらった。

表章氏「女郎花の古き謡考」(観世、七月)は、『五音』によって存在が知られ、『中楽談儀』にその一部と推測される文句があっただけの、喜阿弥作曲の「女郎花」の謡物の部分を発掘し、それをめぐる諸問題(全容の推定、現行曲女郎花との関係など)を具体的に論じたもので、非常に興味深く読むことができた。

雑誌「観世」は、隔月に作品研究を掲載しているが、今年の方は、西野春雄氏「玉井」(一月)「三井寺」(九月)、堀口康生氏「羽衣小考」―その成立の背景について―(三月)、松本擁氏「頼政」(五月)、表章氏「葵上」(八月)、伊藤正義氏「錦木」(十二月)があり、それぞれ特徴が出ていて有意義だった。

狂言関係の論考を一括してみておくことにしたい。

橋本朝生氏に、「『木六駄』の形成と展開」〔能―研究と評論3、一月〕と「天正狂言本の出家座頭狂言―狂言の形成序説―」〔国語と国文学、六月〕の二篇がある。前者は、「『木六駄』は、和泉流において形成され、その後鷺流・大藏各派に取り込まれて展開してきたのである。それはまたまず牛追いの演戯を核として形成され、その後酒盛の歌舞を呼びこみつつ展開してきたのであり、その究極が鶉舞の挿入だった」とする説。「木六駄」が牛追いの演技を核として、酒盛の歌舞が後に取りこまれたとするのは、金井清光氏の説（文学、四十八年七月）とまっこうから対立するものであるが、「木六駄」に関する限り、橋本氏説の方が納得がゆく。

後者は、天正狂言本にある出家座頭狂言をみて、天正本で風刺・嘲弄の対象となる出家は定住する僧であり、旅の僧に対しては好意的である。また、天正本では定住した盲人と旅の盲人とは明確に区別され、定住した盲人を扱った狂言は盲人社会内部の対立を描き、旅の盲人は一般人になぶられる。こうした明確な区別は、聖としての猿楽法師が、自身の姿を舞台上に登らせることによって旅の僧の出家狂言が形成されたからではないか。そして天正本はまだ漂泊の芸能であった頃の狂言の姿を伝えているのであった、とする。出家座頭狂言のより古い型を求め、その形成の出発点を考えようとしたもので、示唆に富む論考といえよう。

田口和夫氏「狂言『人馬』と説話―昔話と狂言その2―」（説話5、六月）は、狂言「人馬」の諸本を検討し、その流動の様相を探って原型を相定し、結局「人馬」は『沙石集』の誑惑法師説話から

その想を得、『宝物集』系旅人馬説話を参照し、下人層の活躍を主軸として成立した、とする。永井猛氏「狂言『禁野』の形成と展開」〔説話5、六月〕も、「禁野」に関し諸流諸本の検討を中心にすえ、原型を探ろうとしたもの。両氏ともに、説話の狂言化と展開を論ずる点で共通しており、共に興味深く読むことができた。資料紹介の類のうち、西野春雄氏「新資料紹介三つたり」〔能―研究と評論3、一月〕は、これまで存在を知られていなかった珍しい曲の鬺印紹介。この新出「三つたり」は、『未刊謡曲集（六）』所収の「御渡（みわたり）」とは全くの別曲。「能本作者注文」が世阿弥作の女能の項に掲出する「みわたり」が新出の「三つたり」にあたるだろう、と推定される山。原本は観世元正氏蔵。

中村格氏「宗随本古型付の研究（一）―解説と本文」（学芸国語国文九・十、一・六月）は、およそ文禄以前の、下懸り系統の内容を伝えると思われる型付・装束付伝書の鬺印紹介。収載する曲目数が多く、かつ明確・詳細である点、および、型付・装束付における観世・金春両座の相違など明記して、流動期における能楽の諸相を伝え得ている点など、研究者にとって参考になる、とする。底本は鴻山文庫蔵。（一）（二）では未完。

前西芳雄氏「京都南陽舎番組（1）（2）」（金剛89、七・十月）は、京都金剛家で見つけられた古番組の紹介。明治十六年九月二日の南陽舎月並能から明治22年四月十九日の稲荷神社奉納能まで、約六年間にわたっているという。明治初期の京都金剛流の動向を知ろうえに貴重な資料である。（2）までで十三回分を紹介、未完。

「観世宗家所蔵文書目録（付解題）」（観世、七月・十月・十二月）

は、表章氏の執筆。七月が室町期上掛り謡本(元)と室町期下掛り謡本、八月は室町期下掛り謡本、九月・十月・十二月は軸物の類について解題。間狂言本文紹介の田中允氏「雕刻古版本間狂言(一)」(青山語文四号、三月)は、小汀文庫旧蔵本紹介の二回目、未完。
文献資料の紹介ではないが、松本雍氏「檀風ノート」(能一研究と評論3、一月)がある。昭和四十八年十月五日上演の稀曲「檀風」(シテ宝生英雄)の、舞台上の動きを記録したもので、今後の上演舞台と比較する時役立つだろう。

最後に、パンフレット類所載のものでは、おもてあきら氏「百々裏話」が第百回「南都雨悦ビノ能」(鍊仙、三月)で完結した。

以上で、四十八・四十九年の展望を終るが、二ヶ年分を見たので、脱漏も少くないと思われるが、それらは次の機会に補ってゆくようにしたいので、ご了承いただきたいと思う。終りに特殊な文献などについて二三ふれておくことにしたい。

まず、『謡曲百番 元和卯月本』(版本文庫5)の復刻刊行。全百番を四期分割刊行の第一回で、二十五番(高砂・朝長・井筒・鞍馬天狗・百万・養老・八島・源氏供養・山姥・すみだ川・呉服・杜若・安宅・女郎花・唐船・鶺鴒羽・盛久・定家・ぬえ・さねもり・二人静・竹生鳥・たまかづら・善界・班女)を刊行。原寸大に造本されている。解説は伊藤正義氏。

次に『能楽囃子大系』(金春惣右衛門・増田正造監修。ビクターレコード)。能の音楽の面白さと、その独特な音楽構造とを明らかにするため、一般に囃子事と呼ばれるものを体系的に網羅したレコードとその解説書。レコードはともかく、所収曲目の解説を

中心にすえて、百頁を超える別冊解説書は、楽器の構造と奏法・演奏の実際・八割の記譜法・採譜法・現代音楽と能・伝統芸能と能・流儀の歴史と芸風など多岐にわたる内容で、まさに「従来例を見ない『能楽囃子事典』といった性格を帯び」ており、利用価値は高い。執筆者は、監修二氏のほかに、蒲生郷昭・松本雍・羽田昶・西野春雄の諸氏が中心となっている。
四十八・四十九年中に刊行された古記録の類で、能芸史研究に役立つと思われるものを刊行順に列挙しておく。

(四十八年)

- | | | |
|-----------------|-----------|-----|
| 史料纂集 『経覚私要鈔第二』 | 文安六年正月 | 一月 |
| 史料纂集 『兼宣公記第一』 | 嘉慶元年正月 | 二月 |
| 大日本古記録 『言経卿記八』 | 慶長二年七月 | 三月 |
| 史料纂集 『北野社家日記第四』 | 明応二年正月 | 四月 |
| 史料纂集 『元長卿記』 | 延徳二年正月 | 四月 |
| 史料纂集 『舜旧記第二』 | 慶長七年 | 六月 |
| 史料纂集 『北野社家日記第五』 | 文禄三年正月 | 七月 |
| 史料纂集 『山科家礼記第五』 | 長享三年四月 | 十月 |
| 史料纂集 『北野社家日記第六』 | 慶長六年正月 | 十一月 |
| 史料纂集 『師守記第七』 | 貞治三年二月 | 十二月 |
| (四十九年) | | |
| 史料纂集 『教言卿記第三』 | 応永十五年九月 | 四月 |
| 史料纂集 『教興卿記全』 | 同 応永十七年三月 | |
| 史料纂集 『師守記第八』 | 同 貞治三年八月 | 八月 |